F-6

戦後韓国語における新聞の外来語の量的推移
-日本語の外来語の量的推移との比較-

明治大学大学院生　黄 秀智(ファンスジ)　8350409@gmail.com

要旨

20世紀後半の新聞データを用いて日本語の外来語の基本語化を研究した金(2011)を参照し、発表者が独自に作成した1945年から2005年までの韓国の新聞コーパスから、韓国語の外来語の出現率の量的推移を確認した。さらに、新聞社説を用いて外来語の量的推移を明らかにした橋本（2010）を参照し、韓国語の外来語の量的推移とその社会的な背景を分析した。その結果、1950年に外来語の使用率が78.06で高い日本とは違って韓国の1945年の外来語の使用率は7.69で顕著に少ないことが確認できた。また、日韓とも1950年代から2000年代まで右肩上がりであり、1950年代から1960年代には急増して1960年代から1980年代までは停滞、1990年代半ば以降になると再び急増するという傾向が類似していることや外来語に対する当時の全般的な社会意識や社会的背景も類似していることが確認できた。

1.はじめに

現代の日韓外来語の使用状況をみると、韓国は意訳である「백화점(百貨店)」「편의점(便宜店)を使う反面、日本は音訳である「デパート」「コンビニエンスストア」を使用する傾向がある。またCHANG(2016)によれば、現代の日韓外来語の使用比率が韓国より日本の方が２倍弱多いことが報告されている。このような違いが生じる要因を明確にするためには通時的な研究が必要である。日本の場合は、新聞社説を用いて外来語の通時的量的分析を行った橋本(2010)や新聞を用いて20世紀後半の外来語の推移を明確にした金(2011)があるが、韓国の場合は、外来語を通時的に分析した研究は見当たらなく、日韓外来語の通時的対照研究は現段階では報告されていない。そこで、本発表では、戦後直後である1945年から2005年までの韓国の外来語の新聞データを作成して量的推移を分析した上で、日本語の外来語の新聞データを分析した金(2011)の研究結果と比較し、日韓における外来語の量的変遷過程をとらえることを目的とする。

２．先行研究

まず、韓国における先行研究には、『동아일보 역사 코퍼스(東亜日報歴史コーパス、1920年~2011年)』を構築して韓国語の言語変化の計量的研究を行ったLEEほか(2014)がある。また、『日本経済新聞』と『매일경제신문(毎日経済新聞)』の社説を用いて6年間の日韓外来語の量的分析を共時的に行った岸本ほか(2022）や日本語と韓国語の均衡コーパスの語彙表である『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』と『現代国語使用頻度調査1・2』を用いて、現代日韓の漢語や外来語の使用率を比較したCHANG(2016)がある。一方、日本における研究は、新聞社説を用いて1911年から2005年の外来語の量的推移を明らかにし、その増加をS字カーブで説明した橋本(2010)や、20世紀後半の新聞コーパスを構築して抽象的な外来語の基本語化を明らかにした金(2011)がある。

日本では、外来語の歴史的研究のためのコーパス構築や外来語の量的変遷の研究がなされている。しかし、韓国では、外来語の共時的な研究はあるが、外来語の通時的研究が行われていないため、長期間にわたる外来語の日韓比較研究が困難である。

そこで、本発表では、①韓国語の通時的なデータを作成して韓国語の外来語の量的推移を確認して、②先行研究である金（2011）を参照し日韓の量的推移を比較を行い、③橋本（2010）を参照し日韓外来語の量的推移の社会的背景を比較分析する、という3点を課題と設定して、戦後日韓外来語の量的推移を明らかにすることを目的とする。

3. 分析対象

3.1　日本語コーパスの概要

本節では、韓国語の外来語と比較する金（2011）の日本語のデータを簡単に紹介する。金(2011)では、『毎日新聞』を用いて1950年から2000年までほぼ10年おきに毎月2日（5日、15日）分、各年24日分の記事を利用して全体で1000万字を超える大規模なコーパスを独自に構築した。その上、形態素解析器には「mecab（ver.0.98）」を、解析辞書には「unidic1.3.8」を用いて外来語を抽出した。その結果をまとめると以下のようである。

表1　金(2001)による各年の文字数や外来語の延べ語数・異なり語数

年代	1950年	1960年	1970年	1980年	1991年	2000年
全体文字数	530,678	1,161,251	2,153,286	2,131,901	1,823,274	2,332,788
延べ語数	3,930	15,738	27,425	27,543	21,897	39,378
異なり語数	996	2,043	2,782	2,699	2,545	3,286

3.2　韓国語コーパス概要

3.2.1　韓国語コーパスの基本情報

本研究では、3.1節の金（2011）に倣って、韓国語のデータを作成した。金（2011）の日本語データと比較できるように、戦前から現在に至るまで発行されており、戦後直後からの外来語を確認できるという点で、韓国新聞の『東亜日報』を利用した。今回、分析対象とするのは、1945年の12月から10年おきに2005年までの全7年間、各一ヶ月分のデータである。各年の新聞のページ数と日数は以下のようである。1995年と2005年には、日ごとにページ数が異なるため平均で示した。

表2　『東亜日報』のページ数

	1945年	1955年	1965年	1975年		1985年		1995年	2005年
ページ数	ほぼ2	4	4	4	8	8	12	平均30	平均25
日数	28	31	31	18	8	1	25	27	26

『東亜日報』はページごとにジャンルが指定されており、1945年は「総合、社会、政治、文化」が、1965年から1995年までは「総合、社会、政治、経済、文化、スポーツ、科学」が指定されている。2005年からは、より詳細にジャンルを区別しており、その内容をみると、大きく「A東亜日報」「B東亜経済」の二つのセッションに構成されていることが分かる。「A東亜日報」には、既存の「総合、社会、文化、スポーツ」と新しいジャンルとして「企画、首都圏、国際、映画、TODAY、オピニオン（社説のみ)、本・文学、健康」などが乗せられている。「B東亜経済」には、既存の「総合、経済」と新しいジャンルとして「金融、漫画、占い、テレビプログラム」が載せられている。資料の整合性をとるため、2005年からは「A東亜日報」の全体のジャンルと「B東亜経済」の「総合、経済、金融」を調査対象にしてデータを作成する。全ての記事類を対象とするが、広告、小説、詩、英語会話のテキスト等は除外する。

3.2.2　韓国語コーパスの作成方法

まず，新聞社のホームページで新聞紙面のpdfファイルをダウンロードし、OCR処理ができているPDFからテキストをそのままコピーしてテキスト化する。次に，テキスト化されたデータを「秀丸エディタ(ver.8.81)」を用いて整理した後、全体文字数を確認する。本研究では、日本語との比較対照研究であるため「分かち書き」を全て削除して「全体文字数」を数えた。その結果、韓国新聞の各年の文字数は以下のようである。

表3　『東亜日報』の各年の全体文字数

年代	1945年	1955年	1965年	1975年	1985年	1995年	2005年
全体文字数	309,622	838,885	756,526	1,324,824	1,313,442	2,689,943	2,285,273

次に、外来語を抽出する。1945年から1985年までの韓国新聞の表記は漢字ハングル混じり文であるために正確な形態素解析は困難であることや1985年までの外来語表記法が現在の表記法とは違うため統一されていない点から、外来語抽出は目視によって行う。1995年からは漢字語の使用が減り、1986年に韓国の文教部（現在、教育部）から「外来語表記法」が告示されたことにより表記のゆれが少なく現在の表記と同様であるため、1995年と2005年の外来語は韓国語の形態素解析器である「Kiwi　：Korean Intelligent Word Identifier」を用いて形態素解析を実施した。その上、正確度を高めるため再度目視で確認して外来語を抽出した。調査単位は短単位を用いるため、抽出した外来語は「WEB茶まめ（https://chamame.ninjal.ac.jp/）」を用いて解析を行った。

４．分析結果

作成した韓国新聞コーパスの規模は、全950万字程度である。3節の金（2011）のデータの示し方（表1）にならって韓国新聞データを示すと、以下のようである。

表4　韓国の新聞データによる各年の文字数や外来語の延べ語数・異なり語数

年代	1945年	1955年	1965年	1975年	1985年	1995年	2005年
全体文字数	309,622	838,885	756,526	1,324,824	1,313,442	2,689,943	2,285,273
延べ語数	238	1,620	4,567	6,896	8,218	28,521	26,400
異なり語数	58	233	530	472	544	1,352	1,117

金（2011）の場合、ページ数が非常に少なかった1950年と1960年を除けば1970年からの全体文字数は200万字前後を示す。韓国の場合、1945年には2ページでページ数が非常に少なく1955年と1965年も4ページであるため、1945年から1965年までの文字数は各年100万字を超えない。1975年と1985年にはページ数が若干増え、130万字前後を示す。韓国新聞の場合、1987年に「言論基本法」が廃止されたことにより、新聞と雑誌の発行や新聞のページ数の増量も自由になるため、1995年からはページ数が平均25ページを超え、文字数も250万字前後を示すようになる。出現する外来語は金（2011）と比較して分析するために「1万字当たりの外来語の出現度数(出現度数/総文字数×10^4)」を求めて比較することにする。

まず、　金（2011）のデータを用いて1950年から2000年までの日本語の外来語の量的推移を見ると以下のようである。

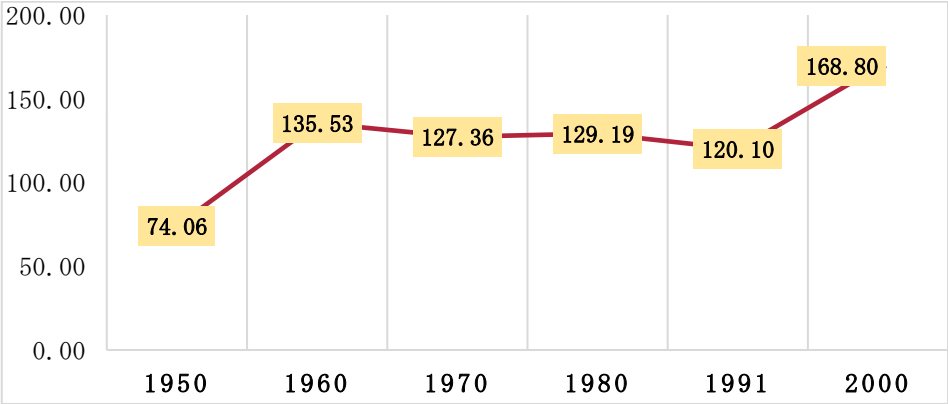

図1　金（2011）のデータによる1万字当たりの外来語の出現率の推移

図1を見ると、日本語の場合、1950年の出現率が74.06であり、1960年に急激に増加して1991年まではほぼ横ばいてあるが、その後、2000年には再び増加して出現率が168.80であることが分かる。橋本(2010)によると、1950年代後半から急激な増加が始まり、1960年代の前半まではそのような傾向が続き、1970年代半ばを境とし、その後は戦後前半期のような大きな増加は見られないと言う。このような傾向は1990年代まで続き、2000年代に入ると増加の兆しが見られると論じているが、金(2011)のデータからも橋本(2010)で論じている傾向が見られることが確認できる。橋本(2010)では、このような傾向が見られる要因を社会的背景を考察して説明しているが、その内容を簡単にまとめたのが以下の図である。

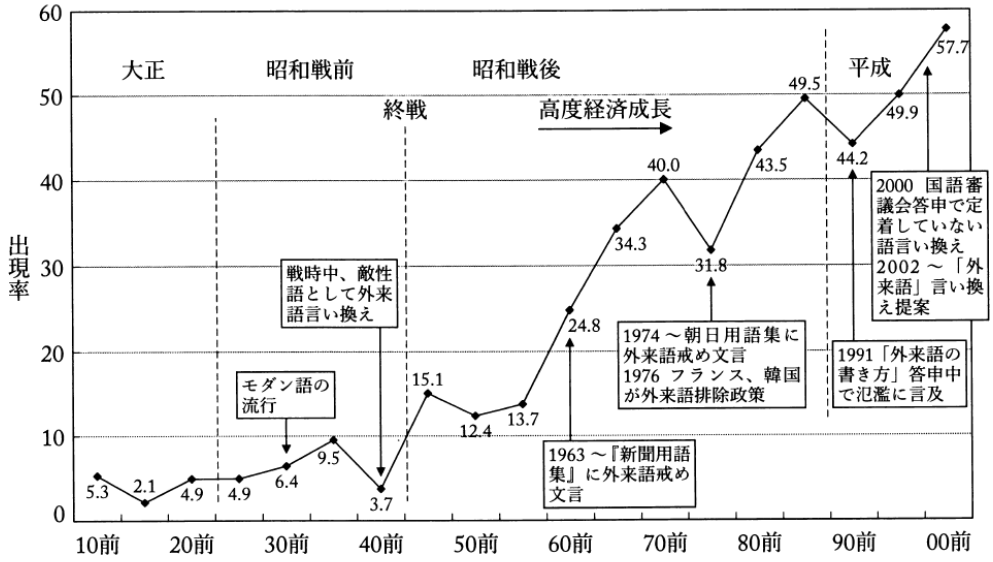

図2　橋本(2010)による普通名詞の推移と社会背景

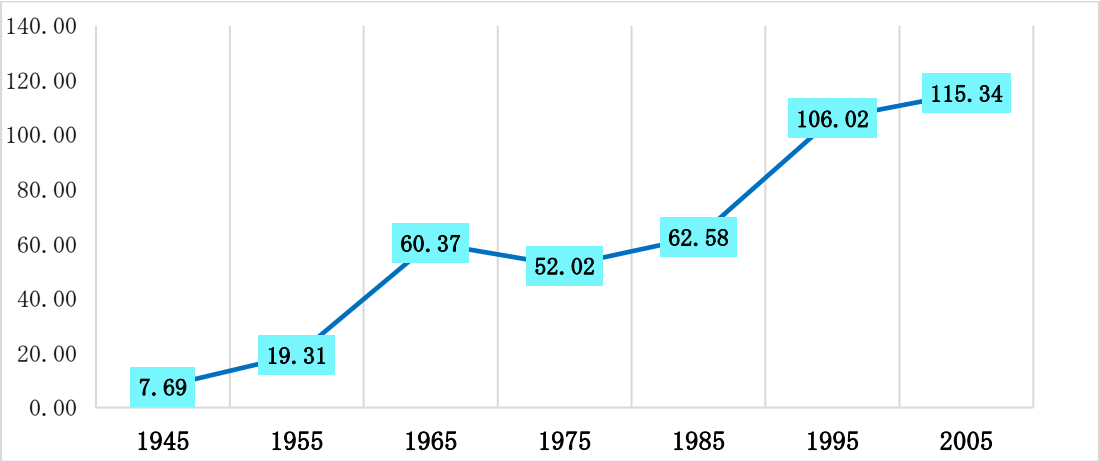

図3　韓国の新聞データによる1万字当たりの外来語の出現率の推移

一方、図3の韓国の場合を見ると、戦後直後である1945年の出現率は7.69で、1965年に急激に増加して1985年まではほぼ横ばいてある。1985年から少し増加する傾向であるが、1995年で大幅に増加してそれ以来も増加し続けていることが確認できる。その背景として、次のような社会的背景が推測される。以下の内容は韓国語史の参考文献をもとに、記述する。

19世紀末期以降から韓国語には西洋由来の外来語が多く輸入されるが、まだ、韓国語として定着しておらず、初期の段階ではハングルで外国語を表記するよりは、漢字語で表記するケースが多かった。(MIN,1998) 1930年に出版された「モダン朝鮮外来語辞書」の見出しの14,000語の中、94%が英語由来であることからも外来語の使用が多かったことを示している。(KIM,2016) 新しい文明（西洋）の受

け入れに伴い固有名詞である地名・人名の外来語をはじめ、日本を経由した西洋外来語が多数韓国に輸入されるようになる。1945年以前の小説や雑誌では多くの外来語が出現しているが（LEE,SANG-HYUK,2014)、本発表の対象語が音訳語（ハングル表記）のみであることや戦後直後(1945年)の韓国新聞では媒体の特徴上、宣言文・政府の発表・公式文などが多いため、外来語の出現が少ないと考えられる。1950年から1953年までの「韓国戦争」が終わってから韓国ではヨーロッパからの外国語や英語がより多く輸入されたと言われている。(KANG,1985）そのため、戦争が終わり社会が安定していく1965年には、そのような影響を受け外来語の出現率が高くなると考えられる。しかし、1965年から1985年までは増加や減少といった特徴付けられることが難しくほぼ横ばいてあることがわかる。この背景には、社会的要因、その中でも国語政策が関わっていると思われる。

CHOI(2003)による韓国国語醇化政策の歴史とその内容を基に韓国国語政策について説明する。戦後、韓国では本格的な「国語醇化」が始まる。「韓国語浄化」という方針の醇化政策は、その当時、韓国で使われている日本語を醇化することから始まった。その後、1962年に「ハングル専用特別審議会」が設置され、1967年になるとハングル学会で政府の政策を支持するということで「わかりやすい辞典」を発刊する。この中で採択された語彙は、①難しく古い漢字語　②残されている日本語　③西洋外国語であり、ここからもわかるように、1960年代までは西洋語よりは漢字語と日本語を醇化しようとする動きが強かったと言えよう。1970年代に入り、政府から「ハングル専用5年計画」を発表、政府の文章だけではなく、公的場面や言論出版の業界へハングル専用を進める指示を出した。1976年、大統領の指示に従った国語醇化運動は新しい方向へと転換、既存の政府、公的場面、言論出版だけではなく、生活用語、学術、法律、スポーツ、俗語など、醇化の範囲がより拡大していく。1984年、韓国国立国語研究院が設置された後はその範囲がさらに広くなる。1990代以降からは国語醇化運動が行われているとしても高速な情報化・国際化が進展し、そのスピードと伴い外来語が急増していくと考えられる。

以上のように、1965年から1985年までほぼ横ばいてある原因の一つとして、国語醇化運動の影響の可能性が考えられるが、同じ時期日本でも外来語が増加しておらず横ばいてあることを考えると、それ以外の要因も考えなければならない。

そこで、日本と韓国のデータを比較してみよう。金（2011）のデータと韓国新聞データには5年の差があるため、図1と図3を年度に合わせて示した。

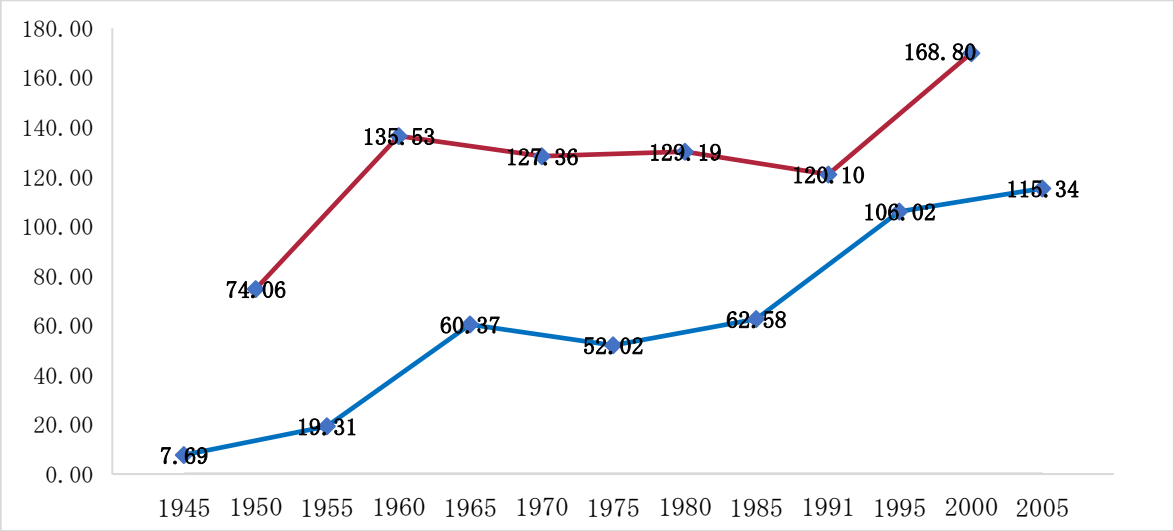

図4　日韓の1万字当たりの外来語の出現率の推移比較

図4は、作成した韓国のデータと金(2011)のデータを示したグラフである。これを見ると、全体的には日韓とも増加していくことは同じであるが、いくつかの特徴が見られる。

既に1950年に外来語の出現率が74.06で高かった日本とは違って韓国の外来語の使用は戦後直後は7.69で顕著に少ない。日韓外来語の戦後と現在の使用率を見ると、日本の1950年と2000年の使用率は

74.06から168.80へと、韓国の1945年と2005年の使用率は7.69から115.34へと増加していく。日本語の外来語は戦前から使用率が高く、それに比べ、韓国語の場合は、戦後直後から日本を追いかけ外来語の使用率が高くなることが読み取れる。

先行研究を見ると、日韓とも戦前、外来語の輸入が多くなりむしろ戦中の日本では西洋由来の外来語は禁止されていたものの、日韓の戦後使用率の差が大きいことは興味深い。また、日本の1950年から1960年で急増、1991年から2000年で急増する傾向は韓国でも見られる。もちろん、データに5年の差はあるが、韓国の1945年と1965年までと1985年と1995年まで急増することから急増の年代は日韓ともほぼ同じであるように見える。日本の1960年から1991年までと韓国の1965年から1985年までの推移がほぼ横ばいていることも類似している。橋本（2010）では、国立国語研究所（2006）所収の「座談会」での発言を用いて「60年代までは外来語はまだまだ目新しく、珍しい存在であり、好んで使用されていたことがうかがえる」と記述しており、75年頃日本の言語生活の「伝統化」「保守化」「日本語を見直そう」という風潮から、60年代の爆発的な流行時期を経て一段落する時期であろうと述べているが、韓国の場合もこのような動きがあったと考えられる。ただし、韓国の場合は、上述のように、政府の積極的な動きや外来文化から国を守ろうとする民族性が強かったため、日本より外来語の使用に制限がかかっているとうかがえる。情報化と国際化に伴い1990年代以降日韓とも外来語は急増する傾向になるが、ここで重要な点は、急増しているにも関わらず、韓国語の外来語は日本語の外来語を上回ることができず、増加したとしても日本よりは使用率が少ないという点である。この要因には、とどまっている日本の国語政策である「外来語言い換え提案」とは違って韓国の「国語醇化運動」は2022年の現段階でも続いているという社会的背景のほかに、外来語に対する意識や言語内的要因もあると考えられるが、この因果関係については、今後の詳しく分析していきたい。

５．考察

以上、先行研究と作成したデータを用いて日本と韓国の外来語の量的推移について比較分析を行った。日韓とも1950年代から1960年代には急増して1960年代から1980年代までは停滞、1990年代以降になると再び急増する点では外来語の量的推移の傾向は同じであると言える。また、1940年代から1960年代は外来語や外来文化への関心が高まる急増期、70年代と1980年代は急増した外来語に危機感を感じ抑えられようとした停滞期、1990年代以降は国際化や情報化に伴う急増期という全般的な社会の認識や背景は類似していると考えられる。しかし、このような背景があるとは言え、日韓とも右肩上がりの傾向ではあるが、韓国語の外来語の出現率が日本語より低い原因や戦後直後に韓国新聞での音訳の外来語の出現率が極めて低い理由については、社会的背景の分析だけでは説明し難い。

6．今後の課題

今後、分析内容に基づいて日本語と韓国語の個別語の頻度推移や先行研究との比較を通して日韓の外来語の使用状況を多角的に分析していきたい。外来語は社会的背景の影響を受けやすい語彙であると言われているが、韓国語の外来語の出現率が日本語より低い原因や同じ時期に日韓とも外来語が増加しておらず停滞する傾向にあることについては、本発表で考察した国語政策だけで説明することは難しい。今後、国語政策以外の社会的背景や歴史的事情や外来語に対する国民の意識、さらには、語彙・文字表記・音韻などの言語内的要因も分析し、日韓の外来語の量的推移の背景をさらに研究していきたい。

【参考文献】

【日本】

橋本和佳(2010)『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』ひつじ研究叢書（言語編）第86巻.

金愛蘭(2011)「20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」『阪大日本語研究』別冊3.

【韓国】
KANG,SIN-HANG(1985)「근대화 이후의 외래어 유입 양상」『국어생활』2, 국립국어연구원、pp.23-36.
MIN,HYUN-SIK(1998)「국어 외래어에 대한 연구」『한국어 의미학』2, pp.91-132.
CHOI,YONG-GI(2003)「국어순화정책의 역사와 개관」『국어 순화 정책 연구 보고서』, 국립국어연구원、pp.3-30.
梁敏鏑 (2008)「外来語の歴史と政策から見た日韓対照研究」『日本文化研究』第30輯, pp.71-94.
LEE,SANG-HYUK(2014)「근대 한국(조선)의 서양 외래어 유입과 그 역사적 맥락」『언어와 정보사회』第23号, pp.159-187.
LEE,YOUNG-JAE・KANG,BUM-MO(2014)「현대국어 역사 코퍼스를 이용한 언어 변화의 계량적 연구-가칭 동아일보 역사 코퍼스에 기초한 접속부사 사용 분석을 중심으로-」『韓国学』63, pp.267-303.
KIM,HAN-SAM(2016)「<모던조선외래어사전>의 계량적 분석」『泮橋語文研究』42, pp.177-196.
CHANG,WON-JAE(2016)「한일 양국어의 한자어 및 외래어의 분류와 특징」『日本語文学会』73, pp.137-158.
岸本まりこ・孫東周 (2022) 「新聞社説における高頻度外来語の特徴に関する日韓代証券旧―6年間(2016年から2021年まで)の抽出調査を基に―」『동북아문화연구』제71집, pp.119-134.

【URL】
WEB茶まめ https://chamame.ninjal.ac.jp/ (最終閲覧日：2022年10月10日)
Kiwi：지능형 한국어 형태소 분석기(Korean Intelligent Word Identifier)
https://bab2min.github.io/kiwipiepy/v0.8.0/kr/ (最終閲覧日：2022年10月10日)
동아일보 (東亜日報) 紙面 https://www.donga.com/news/Pdf (最終閲覧日：2022年10月10日)
한국민족문화대백과사전(韓国民族文化大百科事典) http://encykorea.aks.ac.kr/ (最終閲覧日：2022年10月10日)